

嫁からの手紙

清水 桐子（大阪府大阪市・七十二歳）

お姑さん、貴女が逝って五回目の春が巡ってきました。今年も我が家の山の果樹園には、ミカンやキウイの花が咲き乱れています。

明治生まれで、五人姉妹の長女だった貴女は、瀬戸内海が眼下に見えるこの果樹園にあった家で、お舅さんを養子として迎えたのでしたね。

私の夫と姉、弟の三人の子に恵まれ、妹達にも慕われて幸せな人生が続くはずでした。

ところが、享年百一歳、仏壇に並んだ夫婦の遺影の貴女と云えば、穏やかな笑顔の老婦人なのに、お舅さんは軍服姿の青年の面影のままです。お姑さん、貴女は時代の流れのせいで、思いも寄らず「戦争未亡人」として一生を終えなければならなかったのです。

終戦末期、満州に派兵されていたお舅さんはシベリアに連行され、帰国を果たせないまま極寒の地で死亡、遺骨もなかったと長男である夫は、今も悔しそうに言います。秋になると、ミカンやキウイがたわわに実る山に、今は作業小屋がぼつんとあるだけです。当時は住宅もあり、お袋は畑仕事をしながら戦後になっても、父の帰りを待っていたのだと夫は当時を振り返るのです。以前は野菜畑があったという場所に佇んで

「お袋は戦争が終わってから、ずっとここで坂道を上っておやじが帰るのを待ち続けていたんだよ。用がある時は、俺にお父さんが帰って来るから見張るように命令するのだから、たまらなかつたなあ」

と言い、気丈な姑は嫁の私には弱音は吐かずに

「私の若い頃は、夫婦なんて他人みたいでね、何で子どもができたのか不思議なくらいよ」と笑いに紛らせるのですが、そうでないことを最近になって夫から聞かされた私は、何故かほっとしました。お姑さんもやはり、普通の女だったのだと……。

何時だったかお姑さんと二人で、山の斜面に腰を下ろし、海を眺めながら、童謡「♪みかんの花咲く丘」を歌いましたね。あの時の私は、自身の亡き母親を偲んでいたのですが、お姑さんの脳裏には、きっと旦那様の面影が浮かんでいたのでしょうか。

先祖のお墓は町の寺院にありますが、最近夫はまるで道端のお地藏さんのような可愛い墓石を石材店で作ってもらい、その内許可を取って果樹園に両親二人だけのお墓を作ると張り切っています。遺族で共に守り続けた果樹園の沢を吹き渡る海からの風は、まるで両親の化身のように思えます。それは果物に独特の甘みと旨みを与え、市場では「お宅の果物は一味違う」と評判なのが私たちの何よりの自慢なのです。